# 「モノへの注目:真正性のプラグマティックな道程|

Christian Bessy, Francis Chateauraynaud, L'Attention aux choses: Chemins pragmatiques de l'authenticité, Postface à la deuxième éditions, *Experts et Faussaires*, Editions Pétra, 2014

> C. ベッシー, F. シャトーレイノー 著 須 田 文 明・立 見 淳 哉 訳

- I 無限に拡張可能な偽造例
- Ⅱ 法律と市場の間での真正性のかたち:ミクロな変容の研究からグローバルな歴史へ

Ⅲ 知覚の現象学から手がかりのプラグマ ティックへ

真正性の問題はすでに大いに論じられてきたかもしれない. 『真正性のジャーゴン』(『本来性という隠語』、笠原訳、未来社)の中で、ハイデッガーに対してアドルノによりなされたそれを含む哲学論争の中心をなしてきたが、真正性の問題は社会科学により探求されるあらゆる領域に拡散し続けている. 「真正である」/「真正でない」という述語の対を取り上げよう.この対は、多かれ少なかれ、知識のあらゆる領域を横断している. すなわち芸術史や人類学、経済学、政治学、歴史、文学、哲学、科学社会学といった領域である(法律学、知的財産権についての膨大な論争は言わずもがな). 「真正である」(文書や化石、出来事、作品、証言、発言にも適用される述語である)とは、どのようなことか、という問題が提起されていないような場所はほとんどない. それはあらゆる種類の論争や諍い、理論、解釈を生み出すのである. 逆に、この述語は真正性への言及が支配的となった、ということであるとすれば、それは言いすぎである.

1990年代初頭に、社会科学の再定義の運動に取り組んだ我々が、真正性の試験の地位に関心を向けた時、我々は、研究された訴訟の膨大なコレクションに含まれる問題がどれほどの射程距離を持つかを見抜くことはできなかった。すなわち贋作事件や偽造訴訟、専門知の諍い、オリジナリティの要求、記述の形態、歴史の書き換え、これらを通じて、(真実と虚偽との間[キーワード] プラグマティック社会学、コンヴァンシオン理論、真正性

の分割の問題にまで至るような)理論的困難の大陸が、我々の前に立ちはだかっていたのである。真正性の問題が別のもう一つの、これまたやっかいな問題、つまり価値の問題(所与の背景において、ある存在物やモノ、行為がどのような価値を有しているかの問題)を含んでいたからなおさらのことであった。「真正であること」、「真正ならざること」という対立へのそれぞれの準拠が引き起こす感情に着目して、我々は、その概念的企図を構築しようとした。暴露の装置として機能することで、こうした企図は我々の社会の成員の最も日常的な活動に挿入さている現象を別様に眺めるように促した。収集された複数の事例は、それぞれ突き合わされることで、徐々にその異様な性格を失い、より一般的な社会的ダイナミズムを示すようになった。真正性の試験により喚起される運動をどのように名付ければいいのか。「手がかりprise」という語彙をめぐる新しい言語ゲームを発展させることで、『専門家と贋作者』に含まれた提起は、考察と研究の広大なプログラムを切り開いた。かくしてこのような問題提起は、今日でもまだ顕著な痕跡をそこに残すことで、時間を経て、フランス語圏の社会科学の「プラグマティックな転換」なすこととなったのである。

我々は認めなければならないのだが、1995年に刊行された研究を行うなかで、(それを知っ ていたならば、自分たちの調査や問題提起を根本的に変えてしまったであろう)読解やアプ ローチ、もしくは文献には目もくれなかった、我々が学んだことを、別の視点や別の著作(M. ド·セルトーやJ. デューイからB. ウィリアムズ, ハンス·ヨナス, もしくはF. ルスタンを経て, T. インゴルド、G. ディディ・ユベルマンにまで至る、大量の文献の中で当時知られていなかっ た、もしくは近年になって登場した)から眺めて見ることはきわめて有益である。自分が言 おうとしてきたこと,なそうとしてきたこと――ある観念や言語作用の完全な表現を逃れて しまったこと――を理解するのは、しばしば、事後的に、別の読解を通じてのことなのである、 このようにこのテクストもまた、時間を経て、何人かの同僚たちの論文の中で、「手がかりの 理論」となったものについての別バージョンを提示するように促すことを目的としている.『専 門家と贋作者』への社会学者によりなされた批判の一つが、哲学に関わりすぎている、学派 や教義の対立(とりわけ英米流分析哲学と、大陸流現象学との間での)について無頓着である。 というものである.「手がかりの技芸」の様々な次元を探求するためには、我々の準拠集団に おいて当時、ほとんどたいていあまり引用されていない著作の広大な全体を渉猟しなければ ならなかったことは確かである.例えば我々は.H. ベルグソンやM. メルロー・ポンティ.G. シモンドン, G. ドゥルーズ, ジェイムズ, J. ギブソン, F. ヴァレラだけでなく, F. ジュリアン, F. ジルなどを考えることができよう.

知的な流行とは独立して、経験的研究の実践的背景は、この20年間に大きく変化し、1991-92年になされた、不正防止捜査官、次いで、競売人についての最初の調査から我々を隔てている。こうした調査は当初、当時の学術的規範の観点からはそれほど一般的でない軌跡にしたがって、全く制約のない、インセンチブもない純粋な好奇心によって導かれていた。主た

る動機は、哲学と社会学、経済学の接点にある理論的問題意識にあった、すなわち、人々や 集団の間での合意や意見対立の形成において事物の地位とは何であるか、であった、人から 切り離し可能な事物に言及するだけで、経験と、共有された現実判断とを一致させるに十分 であろうか、事物や道具、物質的配置が、社会関係組織化への支えもしくは基盤としてさえ 役立つという考え方は、けっして新しいものではなかったが、こうした考え方が、複数の研 究を特徴付けはじめていたのである。これらの支えもしくは土台がどのようにして突然に崩 壊するのかを理解しなければならないが、それは事物によって引き起こされるトラブルと、 このトラブルを吸収し縮減するために用いられる手続きを眺めることによってなされる。こ のことこそがきわめてヘテロな世界へと我々を誘ったのである。現場での経験を诵じて、不 正防止捜査官や競売人には、税関や弁理士、贋作専門家、古物商、蒐集家、考古学者、時計 職人、文献学者、美術史家、農学者、醸造家、ブローカー、市役所職員の遺失物係、調査ジャー ナリスト、奇妙な現象や超常現象の愛好家などが加わることになった。一方では、確固たる 現実感覚を示すこれらの人々の活動があり、世界についての共通の手がかりの継続的製造を 考えるために、こうした活動は社会学者や人類学者、経済学者、法学者により使用されてい る分析枠組を再検討させることになった。他方で、こうした人々の活動は、二重の縮減不可 能性に基づいた専門知の理論を精緻化することを可能とさせた。すなわち、モノに直に接し た技術的オペレーションを、社会的カテゴリ化の純粋論理へと縮減することの拒絶であり(そ れは、専門知が単に、認証証明書としてのみ捉えられる場合である)、他方で感覚的世界にお ける知覚を、価値判断の表明形態へと縮減しないという配慮である.

1990年代初頭に行われた真正化の試験の分析は、今日、再定式化され、豊富化され、移転され、もしくは複雑化されることに成功した。本書の中心におかれた事物は、絶えず展開され、もしくは、公的アリーナで充満し続けている。すなわち、不正事件や贋作事件、誤認事件が続けて起こっている(その中でアクターたちが操作する技術的、規範的変容により生み出される新しい布置と関連した、驚きやイノベーションをそのつど伴って)。我々は明らかに、差異化と繰り返しの二重の運動に直面している。すなわちたとえ、幹細胞の偽クローンが1990年代初頭には可能ではなかったとしても(Hwang事件)、それは科学的不正の長い歴史に続いて起こっていた。またKervielやMadoff、Goldman-Sachsといった名称と関連した投機的操作が、金融スキャンダルのすでに開花していたコレクションをさらに豊富にすることになった。偽造の争点は、すでに久しい以前から、ブランドやデラックス産品の問題だけに関わるものではなく、医薬品やパソコン、航空機部品、はては原子力発電所部品にまで及んでいる。近年、アップルとサムスンを対立させている争いは、マイクロソフトとアップルとの間での1990年代初頭の類似の商業的争いを思い起こさせる、等々、そしてもちろん、美術界の噂の中心となるような新たな「天才的贋作者」が常に登場するのである。嘘や詐取、誤認、盗作、デマ、イメージ濫用、さらには海賊版。これらのすべての実践が、これらを非合法的とするための保護監

視措置により理論的には想定されているが、しかしこうした実践はけっして完全には不可能ではない。実践的な迂回がこれらの同一の装置の生産と機能において行われており、こうした装置のバリエーションが新たな手がかりを創出してしまうのである。

以下のことを言うのに予言者である必要はない。すなわち、専門家と贋作者との間での永 続的に刷新されるゲームにおいて、ずれや移動もしくは驚きが絶えず見られる、2000年代初 頭に、欧州の紙幣が偽造不可能であると提示されていたし、インターネット支払いが完全に 安全であると想定されていた.しかし偽造欧州紙幣の生産レベルは.ここ数年で絶えず向上し. インターネットの安全性の問題が組織にとっていっそう重くのしかかっている.すべての領 域において、ある表象が共涌に共有されるやいなや、また、世界の中でこの表象を具現化す るような装置が形を兆すやいなや――装置がこの表象を鏡に映し出すために構想されている いじょう、日常経験をたえず豊富にさせることで――、新しい事件を予想することができる。 こうした新しい事件は最もしばしば注意欠如により引き起こされ、この注意欠如自体が、目 印と外観で満足する人々と、指標と記号の製造へのアクセスを有する人々との間での、新た な知覚偏差により生み出されるのである。手がかりのこうした喪失は――解消されざる謎の 場合を除いて、一般的には一過性であるが――不可避的なように思われる。いかなる社会シ ステムも、事物や事物を枠組みづけている装置の堅実性への信頼なしには、持続的に機能す ることができない(しかもこれらの事物や装置は操作可能でもあり、贋作可能でもあるとい うことについては忘れられている).したがって贋作の経済については.周辺での迂回現象が 問題なのではない、さらに、権力と正統性の争点が、装置の中心部での実践に接続されるとき、 その適法性の問題がそれ自体政治的問題となる。すなわちウィキリークスのアノニマス、「ハッ カー」運動が絶えず、このことを想起させてきた(価値――表現の自由はその最も重要なも のである――を擁護するためにインターネット実践が供給する迂回能力を開発することで).

#### I 無限に拡張可能な偽造例

1995年以降,不正及び偽造の事件のリストが絶えず拡大していたとしても,新しい偽造例の特徴の一つは,その強い国際的次元,もしくはむしろ(この偽造例が明らかにさせ,触知可能とさせる)過程の国境を越えた性格である.こうした国際化は,それ自体としては新しいものではないが,現代の事件がどのように登場しているかは資本主義の変容を示し,財や知識の生産流通の新しいレジーム,真正化の新しい技術の発展(もちろんDNAの使用が考えられる)を示すと同時に,(「ネットワークとなった世界」の中でのヘテロな結合の流れの強化や増殖に直面して,規制当局や専門知が見舞われている)困難をも示しているのである.偽造例を解明することに取り組むことなく,我々としては,真正性の様々な姿を再び辿り.それは,創造的贋作者の事例から、科学的誤認もしくは科学的不正を経て、工業的偽造の技術に至る流れを提示

しよう.

# (1) Greenhalgh事件、もしくは「天才的贋作者」の尽きることのない流れ

1997年に、シカゴ美術館はポール・ゴーギャンの粘土彫刻、牧神Le Fauneを取得したが、 それは当然のことながらメディアに大々的に取り上げられた. Sothev'sにより売却されたこ の作品は専門家たちにとって大事件であった。しかもPont-Avenの作家(ゴーギャン)の彫刻 作品のバズルを再構成するために、鑑定家たちによって試験された諸困難をクリアしていた がためにいっそう公認されたのである。しかし手がかりは、ホンモノであるには、明らかに 美しすぎた、こうして10年後になって、専門家たちはこれを贋作であると再格付けすること になったのである。真正化の試験がにわかに(早すぎるほど)コメンテーターたちによって 指摘されたので、贋作者の素顔が噂の的になった、それがマンチェスター近郊にあるBoltonに 定着した一族であったが故にいっそうのことである。この一族は、紀元前1350年に遡ると偽っ たアマルナ妃Princesse d'Amarnaと呼ばれるエジプトの彫刻について既に告発されていたか らである. Shaun Greenhalghが自供したとき、彼はついに、当時83歳と84歳であった両親と 共謀して犯行を行ったことを自白したのである。親たちは偽の家系を使って息子の作品を美 術館や競売会社に提示することを担っていた.こうしてGreenhalgh家はあらゆる方面から注 目の的となった. すなわち息子は「美術学校卒ではないものの、否定しがたい芸術的才能を持っ た贋作者」として描かれ、美術品市場で流通しているあらゆる種類の芸術作品の作者として 描かれている. 牧神Le FauneがSotheby'sの専門家たちの監視を欺くことができたとすれば. それはとりわけて、その競売がShaun Greehnalghの母親の結婚前の名前Madame Roscoeの名 義でなされていたからである.こうして彼は、ゴーギャンの彫刻についての脱漏ある知識から. 「偽りの近代」を発明した。ゴーギャン自身、1886年頃、陶芸の可能性を試みていたのである。 コメンテーターたちはさかんに、Greenhalghを、そのフェルメール(彼の宗教画は当時、専 門家たちに知られていなかった)の贋作で有名になったVan Meeterenと比較するのである.

(以下の具体的事例については省略)

- (2) 金融スキャンダル
- (3)科学不正
- (4) 不正領域の拡張, 医薬品
- (5) 技術標準をめぐる協力と競争、アップルとサムスン

#### Ⅱ 法律と市場の間での真正性のかたち: ミクロな変容の研究からグローバルな歴史へ

Anthony Graftonの先駆的著作は、歴史研究にとっての贋作者と批評家の間の関係の重要性

を示している。より最近になって若い歴史家や人類学者が「贋作」問題に向ける関心は、この問題が、物質的実践と統治技術、政治的文化的表象との交差点での、進行しつつある変容を捉えるためのヒューリスティックな方法であることを示している。

歴史学において最も研究されていることの入門の一つが複製の地位のそれである.「複製者」の活動が必ずしも、単純な「独創性なき模倣」としては扱われてこなかったことを示す歴史家の研究がこのことを示している.というのも、それは技術的行為の学習の共有された観念に由来しているからであり、このことが複製にその社会的有用性を付与してきたからである.オリジナリティと独創性の名の下に複製が貶められるのは、やっと最近のことであり、ロマン派以降のことである(Labrot、2004).もちろん複製品の製造においては事物の価値が疑問視される.芸術及び職人的工芸品の事物の模倣は、あまり貴重でない、安価な素材を使用している(宝石の代わりにガラス、希少な材料に代えて合成品など).しかし複製技術は、絶えず更新される工夫を生み出す(ユニークな事物の増殖を可能とさせるCollas機械のような、専用的機械の場合におけるように).

もちろん模倣される事物は、誤認を目的として、不正に製造されることもありうるが、そ れほど商業的な目的ではなく製造されることもある(歴史の証言が重要であるとき、もしく は集合的アイデンティティの支えを作り上げることが重要であるときのように). フランス革 命前には、すべての複製芸術が発展し、「何々流派のà la facon de」製造がもっぱらマニュファ クチャーでなされていた.芸術の規則においては.単に歴史の証言を生産することができる だけが重要なのではなく、当時の「模倣する」という動詞が持っていた主要な意味にしたがっ て、美徳の例を再生産すること(イエス・キリストの模倣)が重要であり得る、こんにち与 えられている否定的な性格を、模倣が持っていないとしても、真正性の問題は絶えず提起さ れる、それは、複製もしくは復現の作業の中で新素材の使用のさいに、とりわけ顕著である、 形態と実質(サブスタンス)の使用から生じる論争は、真正性についての異なった教義を表 明し、そこでは、教育の問題が極めて顕著である、真正性の議論が取る形態の一つは、意味 と価値の喪失リスクを、真正なるモノの移転不可能性と結合させることにある、エリートは、 あらゆる種類の『偽物monnaie de singe』を増殖させないように、この不可能なミッションに 全身全霊で打ち込まなければならない、真正性に固有なこうした緊張を説明するためにこそ、 真正化の試験と、(コピーおよびその他の複製を受容可能とさせ、もしくは正統とさせる)装 置全体を対称的に扱わなければならないのである.

古い記念碑についてAlois Rieglが観察したことに倣って、Manuel Charpyが、1850年頃における事物の古さのみに基づいた新しい真正性のレジームの登場を明らかにした。ついでに彼が想起させるのは、法律に由来する「真正化するauthentifier」という動詞は、とりわけDrouotでの競売における、事物の専門知を指し示すために、1860年代に広まった、ということである。「真正なるモノ」へのブルジョワ階級の一般的熱中について、複数の解釈図式があ

り得る。すなわち階級及び階級分派のライバル意識の効果、もはや貴族だけの専有物ではない良い趣味を押しつける果てしなき闘争, 市場的希少性の真のフェティシズムの開始(これは、聖遺物のかけらの崇拝から始まっている)、などである。区別立ての行動もしくは模倣的欲求を超えて、崇めるという形が見られる。19世紀末には、愛好家もしくは蒐集家は再生産の技術的偉業を賞賛する。その発展は歴史的真実に資するというのである。

#### (1) 人類学的バリエーション

真正性の判断の問題が、Arjun Apaduraiにより編集された著作に集められた人類学的研究の中心をなしている。それは、差異化された事物流通様式と、社会的文化的環境におけるその使用との分析によっている。Appaduraiは多様な「価値レジーム」だけでなく、(広大な市場において商品の運動に伴う)知識の断片化と関連した真正性と真正化の政治の複数性を強調している。こうしたタイプの問題は、Kopytoffによる、事物のキャリアと様々な状態――別のモノとその交換可能な特徴が社会的に妥当となり、事物が商品形態をとるさいの――のキャリアについての研究に負っている。中東の絨毯を真正にさせているものについてSpoonerがその好例を与えている。著者は、真正性の概念が定義の上での問題を提起し、それは「品質」の問題と混同されてはならない、とする。彼によれば、大事なことは、単なる客観的基準(年代や、手仕事、それ自身構築された基準)にだけではなく、専門家の仕事(それを通じて真正の事物の選抜と区別がなされる)にも依拠する「真正性の標準」の進化である。こうした専門家の仕事は、権威の地位と知識形態を働かせ、文化的選択に関連づけられる。そこでは、他者(the Other)へと西洋社会を引きつける魅力が争点となりえるし、過去へとあらかじめ挿入されている秩序の欲求、差別化と個人的表現の探求の社会的メカニズム、あれこれの区別立てでもありえる。

したがって、真正な事物の探求は、西洋社会の内的変容に対応しているかもしれない。トルコ社会で問題が起こっていないというのではなく、問題は同じ条件では起こっていない、ということである。すなわち著者によれば、オリジナルなトルコ絨毯の探求は、翻って、その生産者に影響を与え、(真正性の当初の探求を生み出してきた)地方的象徴化を抑制するのである。このことから西洋の愛好家にとっては、彼ら自身の探求により引き起こされるフラストレーションの過程があり、トルコの生産者には、自らの美学的表現の剥奪の効果をもたらす、換言すればエスニシティと文化の商品化が見られる。こうした傾向は文化遺産化の装置によっては、またとりわけ現地住民の文化の権利の保護装置によっては、部分的にしか相殺されない。まったく異なった文脈において、アフリカの事物への愛好家についての研究は以下のことを示している。すなわち彼らの動機は多様であり、それは、あらゆる外的な影響から閉ざされた事物の探求から、儀礼におけるその位置に敏感なエスノグラフィー的まなざしを経て、原初的な創造的振る舞いの美学(キュービストの絵描きたちを刺激したアフリカ

の仮面のような)に至るのである. この点について,同一の議論をめぐって多くの論争が展開している. すなわち事物の真正性は,現地人が行う(行っていた)使用と関係しているのか,それとも継起的なその流通の歴史(この事物に注意を向けた開拓者や人類学者のトランクから,蒐集家のサロンに至るまで,あるいは,美術館の門戸へとつながる古物商のウィンドーに至るまで)へと関連づけられているのか. こうした論争は終わることがなく,事物の真正性の判断の構築的特徴を提起するのである(Bonnain-Dulon, 2006; Lambert 2012).

Appaduraiが示しているのは、歴史を通じて、所有の問題(高価な財のエリートによる取得 として経済に転換される)が、真正性の問題に席を譲ることである。大量生産の技術がデラッ クス産品へのアクセスを平凡化することを可能とした.この財はこうして.その区別立ての 権力の一部を喪失した。Appaduraiによれば、これらの事物が、そのデラックスな事物の品質 を維持するためには、オリジナリティと特異性の概念(今や芸術家や職人の署名と結合して いる)を発展させて、真正性の基準を複雑化しなければならなかった。もちろんモノの真正 性と専門知、評価の問題は、同書所収のPatrick Gearyにより記述されている聖遺物の交易の 場合におけるように、以前にも提起されていた、しかし真正化の文化的レジームが異なって いたのである。そこでは専門家の知識は教会の特権に服しており、こうした特権は、効率的 な儀式の普及を目的としていた(聖遺物の起源の認証がこれに貢献した).他方で、その所有 者に付与される弁別的記号としての事物に、Appaduraiはまず関心を持った。このことは、著 者をして、真正化の過程(「オリジナル」、「度量衡」に基づく)を副次的にさせた、それは、 物質的特徴の検討を関与させ、「良い趣味」についての、ないし、ひとに価値をあたえるもの(価 値を有することで)についての認証や保証の手続きには縮減できない(この意味で.テイス トの政治経済学を定義するために、彼は、西洋現代芸術の世界における、芸術界の専門家と 画廊, 生産者, 学術的権威, 消費者の間の競争と協力を明らかにしている――ブルデューとボー ドリヤールに言及しつつ——).

我々としては、価値分析の観点から真正性の問題に取りかかることで、真正性のレジームのバラエティーを提起した。本書において、主要な議論の一つが、証拠による真正化(指標の突き合わせ)と、存在による真正化(感覚的経験)との間の区別に関わっていた。こうした区別は、(技術の使用を、事物とのじかの経験に結びつける)わかることconprehensionのレジームの表現として、専門家の直感や嗅覚への多くの準拠(状況のなかで観察される)を理解することを可能とさせる。しかしこうした区別は、価値と真正性との間の関係を考えることを可能とさせなかったし、市場の論理もしくはコレクション(その価値増加は時間的に遅れさせられる)の構成による直接的な説明から距離をとることを目指すという本書がもたらす運動を考えさせることを可能とさせなかった。こうした観点から、別の書物が議論の中で取り上げられなければならない。1996年にJean-Pierre WarnierとCelin Rosselinにより出版されたAuthentifier la marchandise 『商品を真正化すること』であり、これは、現代社会を特徴

付ける真正性の探求の批判的人類学を提示している。「真正なる商品」(Poilâneのパンから 100%フランス中央山麓のコナラの樹に至る)の逆説は、事物の貨幣価値の集合的評価と、事物の個人的領有との間の関係から生じる(市場の論理の全面的拡張により特徴付けられる生産的布置において)。この枠組みにおいて著者たちは、その制度化の度合いに応じて真正化のダイナミズムを区別するように促される。というのもそれは、事物の馴致(ブリコラージュ活動におけるような)から規則的、合法的な手続き(自然文化遺産政策におけるきわめて制約的な手続き)にまで及ぶからである。その序説においてWarnierは、フォーマルな手続きとインフォーマルなそれが相互依存的であることを指摘している。

「AOCタイプの制度化は、消費習慣とは対応しておらず、こうした習慣は家族での、あるいは友人の間での、食事の様式や、技術的専門知の獲得、ワインツーリズム、ぶどう園での購入といったパラメーターと関連して、製品の起源を高付加価値化し、最終的に、個人的な想像の凝集に基づくのである。|

「想像」の問題設定に依拠することなく、『専門家と贋作者』で研究されるテーマは、肉体的関与と表象の間での同様の媒介を展開させている。しかし手がかりのモデルがまずもって示すことができたのは、真正性の判断を基礎づけるためには、動員される存在による真正化(事物の評価の手続きの制度化や技術性がどうであれ)が回避不可能であるということである。

# (2) 市場での緊張、法律の使用

何よりもまず、真正性は法的概念である。「文字による証明」に捧げられた節で、消費法典第1327条は「真正なる文書acte」を、「文書が記載された場所で、審査する権利を有する公務員により受け容れられた文書」と定義する。新しい法律のバージョンは以下のように付け加える。すなわち「この真正なる文書は、国務院のデクレにより規定された条件で確立され規定される条件で作成されるならば、電子媒体によっても支えられることができる」。著しく多様な活動と製品に拡張されることで、こうした形式は絶えず問題を提起し続ける。商品が大量に、日常的に、ますます遠隔地にまで行き届くようになったことによって、生産地と販売地、消費地の間で、知識はかなり断片化されている。したがって模造の可能性が確認され続けており、ますます真正性と専門知の問題を提起しており、とりわけ競争法の専門家がこうした問題を指摘している。Appaduraiが示すように、商品やその技術的、社会的、美学的特性についての知識そのものが、商品化の過程の対象となる(サービス活動として)。この過程は、「所有権」の法的制度を変容させ、国際レベルで知的所有権に関する争点を増大させる。

欧州レベルでは、不正防止は、知的財産権に関する指令(2004年4月29日付け)により深刻な再考を促された。この指令は、2007年10月29日の法律によりフランス法に移し替えられた。この法律は民事裁判への提訴を促すことを目的としており(この事件に特化した民事裁判所TGIの設置により)、模造品対策網を通じた情報収集と被害者の損害の補償を結合させる。こ

うした新しい立法は、これに関する公権力の介入の長期の傾向に統合されている、こうした 公共活動は今日、欧州レベルで調整され、インターネットでの不正行為の増殖にも対応して いる。すこし距離を取ってみてみると、その要求に応じて、侵害された側が補償金を得るこ とができること(知的財産権として支払われたであろう権利に対応する)は、不正行為の平 凡化を示しており、法律の道具化に固有な法的工夫を伴っている(企業に利益をもたらす仲 介者にとってのみならず、公的行政にとっても)、こうした平凡化は、紛争のいっそうの司法 化にも、その増加にも帰せられる。知的財産権の戦略的使用は、別の法律の領域におけるよ うに,法律規則への純粋に形式的な適合性を演じることができる.この場合,真の「法律贋 作者 | について語ることができよう。しかし極めてしばしば、不完全な、法的言明を発する ことで、また法律の多様な条文に精通することで、重大事件の偉大な弁護士により試験され た手続きにしたがって、微妙な解釈を合成することが大事なのである. しかしこうした戦略は. 活動と実践の環境から遠ざかるのである.こうした環境中でこそ.――法的な.もしくは規 則の側面で、その問題的性格にも関わらず、彼らが完全に合法的と考える――様々な規範に よってアクターたちは自らの交換を規制し、彼らの活動をコーディネートしているのである。 同時に法的武器の増強が、経験と表象の間での緊張(氾濫と非合法的実践の新しいサイクル を促す)を増強させる.このことは.牛肉をベースにした食品に馬肉が非合法的に混合され ていることが発覚したことで,2013年に指摘された驚きを説明している.欧州の食品部門は 一般的なトレーサビリティの共同体規則により、狂牛病(1996-2000)以降、完全に透明であ ると想定されていたのである.

不正の探査手法の改善に直面して模倣手法が洗練されるさいの上述のダイナミズムは、ここ10年ほどの間でその効果を産出し続けている。2008年12月13日付けの記事の中で、その「重要な遺失利益」と「ブランドイメージを損なう」リスクへの、デラックス産業の言説に間接的に言及しながらも、Le Monde紙は有名ブランドのある代表を登場させる。「ここで不正防止教授とされている」彼は、フランスの税関担当者に訓練コースを行う。「彼の最近のコレクションの事物で満たされた買い物籠を携えて、それは、ホンモノの産品と、「経済インテリジェンスにおける私的な国際調査ネットワークにより収集された」模造品を含んでいる。教育手続きは、けっして新しくはないが、税関職員への模造品の最新の継続訓練は、このことに対する彼らの新しい責任と、コルベール委員会(フランスのデラックス産業70社を集める)のメンバーとの彼らの緊密な関係を証言している。この委員会の代表者は、「官民の間での完全な協力」を祝福し、模造品駆逐への有名ブランドによる資金援助を指摘し、国際化されるべき市場査察の機能のための公的基金の重要性を指摘した。しかしながら当然のこととして提示されたこうした協力は、自明のことではない、歴史学者の研究は、「不正防止活動」の戦略的計画化へと公権力を徴用するために、デラックス産業によりなされるロビー活動の古さを示している(Beauret al. 2006)、ところが「真正品」と「模造品」との間の境界線は、少なく

とも移動しており、不正競争防止装置や健康政策、消費者安全政策、より一般的に、個人的 取引、集合的過程としてのイノベーションの承認に広く依存している。

常識となるに至った解釈の中には、それぞれのイノベーションサイクルへと不正のサイクル (西欧諸国の製造者の新興国での工場設置により強化される過程)を結合させる解釈がある. (以下中略)

# (3) コンピュータ世界の試練にさらされる真正化

(中略)

# (4) 表象と集合的信念の経済

上述の5つの事件は、その度合いは多様であるが、アクターたちの逸脱、ないしは二枚舌 の正当化の問題を提起している。彼らは、共通のルールに並びながらも、少なくとも最も頭 脳明晰な人たち、もしくは注意深い人たちにとっては、この問題が自らの負けをもたらすこ とを意識しているのである。それは社会の全体的傾向に挑戦し、すべてに反対するのが正し いのであろうか、それとも、犯罪者の地位からヒーローの地位へと格上げさせる変容を期待 するのであろうか(密航的抵抗運動のために、高く評価されることになった、これらの贋作 者にならって)。こうした疑問は金融市場についての回り道をすることに利点があり、どのよ うに投機的バブルの生産を説明できるかという回り道をすることが良かろう。オルレアンの 『価値の帝国』が、投機的バブルの生産についてモデル化しているが、それはルネ・ジラール の模倣的欲望の理論に直接刺激されたのであった.このモデルは強い不確実性(2000年代初 頭のインターネットバブルの場合におけるように)の状況により適しているだろう.オルレ アンは、特定のアクターがいかに、熱狂過程についての手がかりを持つに至ることなく、警 告を発し、もしくは、批判に参加したかを示す、2008年の金融危機以前でも同様であった。 つまり支配的アクターによりもたらされた表象に直面して、批判は効果がない、金融イノベー ションと関連したレトリックはリスク削減と高収益の獲得を約束していた.しかしそれだけ ではない、金融評価に固有な不確実性を引き受けることで投資家が、金融は「新しい時代」 に突入したという考えを広め、過去の教訓とその評価規則を時代遅れとした、どんなに教養 があろうとそれほど重要ではない孤立したアクターたちから批判が起こったとしても、多く の情報を集計した金融市場により与えられた指標を前にして、距離を置いて考えることを助 けはしなかった、格付け会社にしても、環境により醸成された信念に順応するしかなかった。 したがって、いったん熱中の過程が発動されると、市場アクターたちは、もはや現行の「評 価のコンヴァンシオン」(それに順応するしか、可能な合理的態度を持ち得ない)と決別する ことができなかった.模倣的な悪循環から脱却するために.オルレアンは国家介入に訴える. というのも、公的な力が、金融アクターとりわけ巨大銀行を救済するために遅かれ早かれ不 可避的に動員されるからである。それはとりわけ「平均的意見」の専制から金融的エージェントを解放することなのである。それは例えば債券を差別化させ、仕切ることによって、専門知と評価の手がかりを普及させることによって、とりわけ企業の金融的健全性を普及させることによってなされる。

オルレアンは、貨幣の立ち上げから貴重な事物に至るまで、実際の特徴を考慮することなく、 広範な種類の事物を扱うべく、模倣的モデルを使用する。すなわち重要な唯一の手がかりは、 記号もしくは事物が、他者により欲求されていること、かくして集合的信念もしくは集合的 表象に全幅の力を与えるのである.こうしたアプローチのリスクの一つは.経済学者にとっ て逆説的ではあるが、あらゆる媒介(価値を共有することを可能とさせる)、まず第一に、身 体そのものの媒介(共通の経験と知覚の支えであり、それによって、多様な記号――警戒信 号を含む――が行き交う)に目を閉ざす社会学主義の形態を実践することである. 模倣論的 モデルが、存在論的、認識論的側面の強い複雑性によって、また高い裁量の度合い(実質的 な特徴や知識様式とは無関係な形態)によって特徴付けられた状況において、あるいは特定 のパニック状態において妥当性を有するとしても、このモデルは愛好家や専門家、収集家の モデルとは決定的に対立する。彼らにとって、欲望される事物の探求は、他者の行動にインデッ クスされず.まず.身体自身のコミットメントに基づいた特異な経験をなしている(たとえ この経験が社会化や共有をもたらしても). 逆に、愛好家と共有された価値の共同体の構築は 手がかりの特異性を排除せず、他者によりたどられた知覚や情動の効果も排除しない、また 合成や混合の要素も排除せず、そこでは情熱が、しばしばカリスマ的リーダーをめぐる集合 的熱狂の形態で同一化する。情動や知覚に関する集合的労働が共通の手がかりの創出の原則 にあり、それは、慣行的な表象や道具的論理に還元されない、金融世界の危機への突入を特 徴付けるような集合的手がかりの喪失の過程とは逆に、あるいはより一般的に、計算者のエー ジェントのネットワークへと変容した職業的専門知システムとは逆に、集合的な知覚的労働 が、崩壊に直面した盲目さから脱却することを可能とし、活性化された、生活された世界へ の根付きの点を持続的に探し出すことを可能とさせる.

#### Ⅲ 知覚の現象学から手がかりのプラグマティックへ

「行動は、ネットワークを中心に分散されているエージェンシーの結果ではなく、むしろメッシュワークの線に沿って導かれる諸力の相互作用から生じる」(Tim Ingold, When ANT meets Spider, Social Theory for Arthropods, in *Being Alive*, 2011, p.92

「手がかり」概念に立ち帰ろう。複数の同僚たちはこの概念をきわめて多様な世界に適用させた。真正性と手がかりとの間の関係を理解するためには、決定的な媒介を導入しなければ

ならない. すなわち知覚による媒介である. モノそのものに接する実践的活動を究明するべく, 『専門家と贋作者』は,「知覚」の哲学的観念に再び取りかかったのである. 『知覚の現象学』の中でメルロー・ポンティがそれに与えた現象学的意味において,知覚から入ることで,それは,最もありふれた経験に接近すると同時に,当時の伝統的な二つの考え方の間での第三の道を開くことであった. 二つの思考は,対立することで,また相互に影響し合うことで,社会科学の中に概念的な強い移動を創出していたのであった.

二枚看板は今日、よく知られ、広く実践されている。しかし我々としては1992-1995年に身を置こう。つまり一方では、新しい科学社会学が、ミシェル・カロンとブリューノ・ラトゥールの創造的刺激の下で、「アクター・ネットワーク理論」の名前で、世界的規模の学派をすでに形成していた。ほとんどすべてに適用できる記述言語によって、ANTはヒューマンと、ノンヒューマンとのアクターの配置agencementの増殖を強調し、ネットワークの中での義務的通過点(移動とイノベーションの連続作用の中でとらえられる)の形成を対象としていた。他方に、フランスの社会学の、平穏ならざる波間にあって、かなり混交的な、しかしダイナミックな潮流が「コンヴァンシオン経済学」として登場した。この新しい運動の重心は、Boltanski、Thévenotによって「価値(偉大さ)grandeurの経済」の表現でもたらされた理論を中心とした社会学集団を中心に除々に形成された。そこでは、アクター・ネットワークは、正当化の制約に直面している。つまり自らのネットワークを連続的に取り結ぶ不安定で、ふくれあがった多くのアクターのイメージに対して、シテの理論は、行動と判断の安定した形態を同定するよう提案し、正当化のオペレーションと、合意とコーディネーションの装置を強調した。

突出した構想が生み出す徴用の効果によってお互いに張り合うことで、これらの著者たちと、そのアプローチのクロスした軌跡について、多くのコメントがなされた。社会における科学技術の問題が主要な問題となっているとことに反論できようか。ネットワークのパラダイムが社会過程においてあらゆるところに存在していることに反論できようか。正義の意味を巡る論争に直面して、正当化と批判の形態の重要さを軽視することができようか。装置と正当化を生産するアクター・ネットワークを与えられて、現在の社会学は、これらの二つの学派により練り上げられたもっとも際だった概念で豊富になることができた。またこれをケーススタディに適用ささせることができた。しかし、この二重の道具には、批判的側面が欠如している。真正性のテストについての追究が登場させることができたのがこうした側面であり、しかしそれは道ばたで頓挫するリスクがあった。すなわち、それはモノへの注目であり、実践により練り上げられた感覚的依拠であり、モノの流れの中に、もっともありふれた注意と参加を十分に根付かせるために必要な感覚的依拠である。そのレトリック的使用を超えて、真正性の概念は意味を変えた。つまり、情動と知覚にまで拡大された枠組みにおいて、この概念は、感覚的なものにおける現前の兆候への具体的配慮の表明となり、現実的なるものの

証明形態と集合的表象, 行為の創造性の様式の交点ないし重複部分で試験されるさいの不安 を示している.

公的主張にもとづいた論争や軌跡の分析においては、(発話の手がかりを特徴付け、モノと の接触の中で展開される感覚的手がかりへと関連づけられる)知覚的、情動的次元はしばし ば無視される。しかし、活性化された世界の中で、感覚的なるものの世界の襞plisと折りたた みreplisへとたどることで、ポジションとその手がかりとの実践的根付きがいかに決定的であ るかがわかる.すなわちアクターが環境にコミットするほど.またこの環境への手がかりを 持った活動の中にとらえられるほど(この環境から彼は経験を引き出し、この経験を彼は自 ずと真正的と格付けることになろう、というのも、モノへの注意に基づいているから)、議論 上のオルタナティブを評価し、ヒエラルキーを産出するために、アクターはいっそう自らの 経験の中核に沈潜することになる、ところが逆説的に、一般性の要請の政治的構築(一般的 に語ることであって、自らの名前で語るのではない)は、アクターたちに対して、ローカル な視点に逃げ込むよう促す.「私が言おうとしていることは、きわめて主観的だけれど,、」. こうした言説上の慎重さ(公共討議やインタビューでしばしば観察される)は、対照的に、 承認された言説の生産をスポークスパーソンの姿へと関連づける。彼や彼女は、環境運動の 中で環境に代わって語ることで、環境を体現し、これを、十全に準備された理由付けの空間、 計算の空間へと投げ込むのである.アクターたちが、このジレンマ(近しい間でのパロー ル/トピックを動員する公的パロール)を逃れようとするとき、このことは、感情的な強い 負荷を産出する. James Jasperが示したように、それは感情を強くコミットさせる抗議行動 なのである.

生活形態の不可視化、忘却や拒絶の生産は、我々の分析に考慮されるべきオペレーションの一部をなしている。論争としての論拠argumentationという考え方は、公共的可視性と関連している。ところが多くの存在やモノ、経験、活動は、公共アリーナ(ミクロ世界やローカルな背景を含めて)においては区別されず、記述できなく、聞かれることなく、理解されない。同一の世界に住まなければならずdwelling、同一の感覚的試験を共有しなければならないのである。ルーティンや、コンヴァンシオン、集合的目印が、生活形態の表明や知覚の差異の表明に重くのしかかっており、暴力的な顕示化のみが不可視なものを可視化させることができるほどである。重要なのは隠された世界を疑うことではなく、嫌疑の社会学もしくは永続的な批判的暴露に手を貸すことではなくて、公共的議論から脇に追いやられていることを考慮することなのである。

知覚や情動の問題は、とりわけ美学の領域で、すでに多くの理論を生み出している。すなわち審美的経験は非真正的ではあり得るだろうか、というのである。経験の基本的カテゴリとしての、美学についてのカント的観念に留まるならば、この場合、非真正性は、事物の側にか、もしくは経験主体の側にか、何か不都合がある。ということを意味してしまう。しか

しこうしたアプリオリな分割を放棄し、影響関係(事物と主体が文字通り自らの場所を交換する)がいかに築かれるかを眺めるならば、どのようなことが起こるであろうか。手がかりという概念によって、関係的でもあり、プラグマティックでもある概念を付与されることが重要なのであった。この概念は、感覚的世界で起こる変容過程において、小さな差異や詳細、ミクロなバリエーションの生産を示すことができる。こうしたミクロなバリエーションについてこそ、日常の社会生活のルーティンにも、非日常的な傾向の探求にも必要な注意や注目、警戒が精緻化されるのである。こうしたことのすべてが、ここまで読んでくださった読者を戸惑わせ、不審がらせるように思われる。もっと詳しく見てみよう。

# (1) 知覚のプラグマティズムv.s.認知科学

「私の結論は以下のようである. すなわち人類学は, 認知科学とよりも, 生態学的心理学との同盟からより多くを得る. またこうした同盟は, 住まうことdwellingの現象学と結合することでうまくいく. なおいくつか直面すべき課題がある. それは文化と生物学との対立を克服することで, また身体の現象学と精神の生態学を両立させることで, また全体的な理論的展望を研究の実践可能なプログラムへと翻訳することで起こる課題である」(Ingold, The Perception of the Environment, 2000, p.153)

『専門家と贋作者』は、感覚的経験に優位性を与え、絶えざる身体的接触に優位性を与える ことができる知覚の社会学を根拠づけるための試みとして読まれることもできよう.こうし た感覚的経験によって存在物は、その環境で刺激され、そこで手がかりを作成し、それらに 鋭敏さと学習、理解を保証するというのである、現在、学問領域の進展と学術文献の進化を 眺めると、我々は、知覚はもはや認知科学の外側、神経科学の外側では考えられない、この ことが認知科学を特権的実験の場所とさせている。現象学の顕著な後退の後で、知覚の問題 は哲学から追い出されてしまったのだろうか、なるほど闘いは不利であるが、力の均衡を回 復する手立てはある. それは例えば、Tim Ingoldの人類学が可能とさせることであり、その 主要著作であるThe Perception of the Environmet (2000) とBeing Alive (2009) が実践的知 識と、沈潜による学習、モノへの注目、感覚的世界への参画、これらを擁護するのである、 Tim Ingoldの著作に、偉大な「プラグマティズム」学者たちがいないとしても、彼がその生 態人類学を発展させるやり方は、知覚のプラグマティック社会学と共通の二つの方向性を登 場させる. すなわち I. Gibsonの知覚の生態学であり、これは西洋の現象学(彼にとってはメ ルロ・ポンティがその第一の代表である) に刺激されており、Ingoldは文化主義と認知主義と いう二つの敵に真っ向から挑むのである。この著者は、近代的思考(アクター・ネットワー クを含む)のあらゆる装置に対して経験による環境のアプローチを対立させる.彼によると、 こうした装置は「場所」を空間におけるポジションへと縮減してしまったのである。こうし

た装置は、過去から切断された時間的継起へと自らの存在を含むように個人に課せられていた.

「この点で、生態学的心理学は、哲学的探求の古い大陸的欧州の伝統と接触させる。それは、とりわけハイデッガーとメルロ・ポンティの著作において代表される、現象学的として広く特徴付けられる伝統である。Gibsonにとって、出発点が、自らの環境における受け手perceiver-in-his/her-environmentであったように、これらの哲学者は、最初から、すべての人が、何よりもまず、世界内存在being-in-the-worldである、ということを提示する。そして、Gibsonのそれと同様、彼らの知的アジェンダは、合理主義(その現代的表明は、心理学領域における認知科学である)に対して根本的に反対するというものであった。しかし何らかの方法で、彼らはさらに先に進んだ。最終的に、常に進行中である過程として、Gibsonは知覚強調することで、知覚者がそこで動き回り探求する世界は、相対的に固定され、永続的であり、いかなる生き物でもそこに住みつくことに準備のできている、そのあらゆるアフォーダンスを予め備えていることを示す。それとは対照的に現象学的観点からは、知覚者その人の登場に沿って、関与される活動の背景に反して、その特徴と共に世界が起ち上がる。人は世界内存在being-in-the-worldである以上、人の存在になることの過程の一部である」(p.168)。

フランス語に翻訳された近著Une brève histoire des lignes (2011) (『ライフ・オブ・ライ ンズ』フィルムアート社)のなかで、Ingoldはすでに精緻化されている知覚についてのアプロー チによって、概念の歴史を提案している、つまり「実践を通じて、知覚と創造性、ノウハウ を学習し、理解すること」と題される研究プログラム(2000年代当初になされた)によって、 また環境の知覚に根付いた知識についてのより以前の彼の研究(野生トナカイの狩猟もしく は家畜群の家畜に印をつける方法)によってである。彼にとって世界に住むことについて学 習し直すことが重要であるので、Ingoldは我々の存在の根幹をなしているものを探求する. こ のとき彼は、二つの形態の線lignesの間での中心的対立を取り上げることで、様々な種類の線 の綿密な目録,分類形態に専心するのである.すなわち,線filsと軌跡である.(足し算的,も しくは引き算的な)軌跡とは異なって、線は表面を持つが表面には統合されない、こうして 著者は線の第三の分類を区別する.すなわち線は.裂け目やひび割れ.折り目(線にとって 基礎として役立つ支えもしくは表面に断絶を喚起させる)によって作り出される。もし表面 が可塑的であるなら、これを切断することなく、これを折り曲げることができるし、このこ とはひび割れではなく、折り目を生み出す、これこそ、我々が、そのライプニッツ論の中で のドゥルーズから借用した襞の概念の使用をより強く喚起させる。すなわち連続と断絶のオ ペレーターとしての襞. 差異のローカルな生産者. 差異化のマルチモダルな駆動者としての襞. 等々である.我々の同僚の誰として,メタファー的すぎる「手がかり」の中に,目印と襞と を接近させる定式を見いだした人はいなかった.しかしながら経験のプランの統合と切断の

コンスタントな可能性にこそ,名前をつけなければならなかった.すなわち知覚は,襞をフォローすることができ,あるいは目印を利用することができ,あるいは(際だったこと,アフォーダンス,記号,表象を結合する接合の労働の形で)展開させることができる.Ingoldにあっては,流通の能力への同様の配慮が見いだされる(たとえ彼が襞による経験の側に傾きがちであるとしても).彼にとっては,最も妥当な差異は,表面の性格の中にある.線と表面との間の関係を極めて微細に検討することで,またその変容を探索することで――それが分裂過程であろうと(軌跡から線への),逆に構成過程であろうと(線から軌跡へ)――,彼は,差異化的関係への注目がどのように,モノへの異なった視点を掌握するかを示そうとし,この点で,プラグマティズムのアプローチに加わるのである.

より一般的に、この人類学者は、いかに「線」が徐々に運動(線を生み出した)から切断 され、軌跡ないし点の継起へと断片化されるかを示し、こうして場所についての我々の観念 を修正することになる.すなわち運動の中での.発展の中での線(ライフ)の交差からコネ クターの生態的な網の目における結節点へと場所の観念を修正するのである。Ingoldはアッセ ンブラージュのモデルよりも散策のモデルを優先することで、旅行や地図、テキスト性につ いて再論する。そこには唯一の目的がある。すなわち人々が、自らが住んでいる環境をどの ように占めるかだけではなく、どのように住んでいるかを理解することである、二重性によっ て機能することで、彼は、二つの旅行の仕方を区別する、すなわち軌跡と輸送であり、これ らは二つの異なった表象様式と関連している.すなわち地図的な見取り図とトポグラフィー 的地図である。前者はオーラル・ヒストリーの背景から生じるが、それは人々が自らの、も しくは祖先の旅行について語るときである(しばしば、別の人々が今度はそれをフォローす ることができるような道を喚起させるために). そこから生じる見取り図は、すでに体験済み の(試験済みの)旅行の振る舞いを再構成し、Gibsonの表現を借りれば、「観察の軌跡」を形 成する、この軌跡の途上で、運動は住まわれる世界の別の現象と相同するのである、逆に、 トポグラフィックな地図を確立するためには、点ごとに組織される、観察の構造ないしネッ トワークにもとづいた。視角全体が必要である。近代的思考に固有なこうした知識様式は、 世界のグローバルな表象を構築することを可能とさせるが、Michel de Certeauが書いている ように、こうした表象は偉大な旅行者の書き物になお根付いている以前の地図を消去するの である.

移動deplacementのさいのモノへのこうした注目、移送locomotionと知覚の間で創出されるこの親密な場所、これらは経験を基礎づけるものであり、その顕著な局面は、知識の移転に固有な語りの対象となることができる。したがってここにこそ、またもや社会科学の中心に、(旅行において、見取り図において、あるいは他のあらゆるインスクリプションにおいて捉えられる)身体のコミットメントがある。線についてのこうした微細な検討は、Carlo Ginzburgの兆候的indiciaireパラダイムを想起させる。このパラダイムはその限界を示してはいたが、

調査の中でおこることを, そしてとりわけ真正性の試験の中でおこることを理解することを 可能とさせた.

# (2) 真正化から存在へ

贋作者についての調査から生じる疑問の一つは以下のように定式化することができる。すなわち、証拠の特殊な形としての真正化の問題にこだわるべきか、それとも真正性一般の問題について調査を続けるべきか(アクターたちが、多様な状況、状態を特徴づけるために使用するのが真正性一般という概念である)。上述で強調してきたように、この真正性一般という概念は、一方では商業的、広告的な、その使用法のために、他方では、その教条的な、ないし反動的な、その過去(もちろんハイデッガーが思い浮かぶ)のために、激しい論争の的となった。

『専門家と贋作者』の公刊後の検討は、真正性の4つの形態の使用を区別することを可能とした。こうした使用の複数性により、チャールズ・テイラーによりもたらされた診断を補完することができる。彼は、18世紀の著者たちの再読によって、彼が「真正性の文化」(「近代の危機」を通じてとりわけ際立つことになろう)と名付けるものを明らかにしたのである。18世紀には、批評の登場により、真実と真正性のテーマが二つの塊に、それぞれ客観性と主観性の塊に分割された。つまり真実という意味でのモノの真正性があり、これは理性により示され、手続化され、確立されることができる。他方で、存在物の真正性はその意識の内面性に関連づけられる。ルソーの『孤独な散歩者の夢想』の引用が有効である。

#### (中略)

内面性と公的表明との間の緊張を明示的に扱っている多くのテクストの中で、モンテス キューの『真摯さの称替』に頼ることができる。(中略)

今や、真正性の概念の通常の使用法を支えている4つの姿に行き着く、

- ①認証もしくは真正化の試験の結果として真正性がある。ここには、上述で展開されたような証拠のバリアントが見られる。つまりある事実が、実際に証明されたという意味で、それは真正である、という事実について言われるであろう。例えば「Glozelの考古学的遺跡で発掘された事物は真正である。Glozelの前史時代の遺跡の真正性が決定的に確立されたし。
- ②次いでプロトタイプな形態への関係としての真正性がある。この使用は「漸進性」を許容する。別の候補よりもより真正的な候補、目標とされているカテゴリの中核により近い真正的な候補がある。別のものよりもより真正にパリ風のカフェがあり、別のものよりもより真正なボルドーワインがある、等々。つまりそれらは、「パリ風のカフェ」もしくは「ボルドーワイン」という概念に括られるものの典型的特徴をいっそう体現しているものである。しかしここで見られるのは、カテゴリへの関係が、品質の評価をコミッ

トさせるのであって、単に推論だけによるのではない、いかにして、品質の評価が、(推論に使用される)基準やパラメーターを産出することができるか、ここにこそすべての問題があるのであって、知覚の生態学理論を通じて、襞と目印の間の相互作用(その中で適切な手がかりが形成される)を考察することで、我々が解決しようとしたのがこの問題である。

- ③計算や慣行的秩序、仮面masqueを中断させる形態としての真正性がある。その否定的な 形態で、我々は、しばしばこの事例にアクセスする。すなわち行為や表現、発話の背後に、 計算や利害があり、それは演出にしかすぎない、というわけだ。そこにもまた漸進性が ある。ある存在は、それが他者とのその関係において計算やコンヴァンシオンに対して 余地を残しておく割合に応じて、多かれ少なかれ真正的である。引きはがすことができ るような仮面の堆積がある。このことが、多かれ少なかれ「自然である」と言わせるこ とを可能とさせるのである。
- ④存在の言語的な表現としての真正性がある.そこにあること,迂回なしに代表性なしに コミットされ,完全に,そこにいること,である.この集中的で,あらゆる計算から自 由なコミットメントは,上述の意味のラディカル化である.しかしここには身体による 真正化の可能性は見いだされないのではなかろうか.

我々は、客観的から主観的へと単純に移行するのではなく、循環の上を移動していることがわかる。円の中心部には最も形式的な定義、したがって「必要条件をすべて備えた」「真正なる文書」について(民事)法が与えられる。

この真正性というタームが曖昧で、浮動しているように見えるのは、様々な基準が絶えず混合されるためである。しかしいわゆるコンテキストの中で、この概念はしばしば自然な場所を見いだす。例えば、ある日、ラビン氏の未亡人がアラファト氏に語った。「私の夫は、あなたが平和の真正なパートナーであると見なしていました」。そこでは、平和への、利害なしのコミットメントへの準拠が問題となっているのだろうか、それともアラファト氏がラビン氏にとってなしていたパレスチナ代表の正統なる性格、それとも明白で議論の余地のない文書によってなされる証拠、それとも交渉の形式的側面を超えたもの(端から端まで真実であることで)が問題となっているのであろうか。客観的な真正化と、気持ちとしての真正性という断絶というよりもむしろ、ここでは円形循環の形が描かれる。というのも、ある形態から別の形態にたえず移動することができるからであり、そこで、もっとも中立的な法律的定義(すなわちフォーマルに真正化されたものが真正である)により形成される中心によってこれらが合わさるのである。

同時に、なぜ偽物と模造品の発見が、(それ以前になされていた受容すべてを同時に関与させる)顕著な試験をなしているかが理解されるであろう。すなわち真正化の最初の試験は不

完全であったか、もしくは誤っていた。存在物はカテゴリに括られたが、今やそこから遠ざかっている(しかしながら漸進性がある、というのもいわば誤認されるべき「美しい模造品」もしくは「美しい贋作」が存在し得るからである)。人や事物へのアクセス、その軌跡、相互作用が、隠された利益や形式を含んでいた。ついには、存在が決定的に動揺しており、絶えざる不安や懐疑を生み出している。「発言する」とは、すなわちその発言に完全にコミットしたことを意味しており、できるはずもないことを空約束したことではない。発言への行為の一致という真正性の制約は、コンヴァンシオンへの適合関係と現前との混合と関連づけられる。すなわちここには約束が見いだされる。あたかも約束が、真正性の証拠を事細かく創出するかのようである。しかしこの種の試験は通常の相互作用においてはけっして表明されない。といのも、上述のように、真正性は、表明されたとたんに損なわれるからである。その表明は、存在を証拠の制約に関連づけることで、即座に計算空間を創出する。

存在ほど触知可能な(自明な)ことがあろうか.明白な証拠を産出するとは,存在させることを意味している.外見上,存在よりもはっきりしたことはないし(我々はそこに,XないしYを前にして,あれこれの場所にいる),異様なことは何もない.そこにいることもできるし,いないこともできる.事物の中に存在を感じることもできるし,存在を表明するやいなや,気がちがっている,もしくは非合理的だとされるというリスクがある.あらゆる形態のコミットメントを示すことで,状況における自らの存在を変化させることができる.自明さとは存在である,と述べることは,なお多くの問題を提起する.というのも存在様式を特徴付けなければならないからである.存在,監視の状態,注意,これらが警戒と批判の登場の過程の分析において決定的であったのである.

#### (3) 手がかり: 反教義的治療薬として、継続的に立ち帰るべき概念

「手がかり」概念は、多くの同僚たちにより採用され使用され、議論されてきた。彼らは、 状況における感覚的経験の再確立を要請するあらゆる種類の事物についての、記述的、分析 的なその射程範囲を豊かにした。手がかりのプラグマティックを顕著に豊富にさせた研究者 たちの中で、Hennionが特権的な地位を占める。多くのテキストの中で、彼は、何が手がかり をなしているかという問題を展開し、こうした研究者の陣営において行為モデルを推し進め た。それは、彼がテイストを、世界へのアタッチメントの問題含みの主要な様式とした時で ある。彼は、「愛好家の反省性」についての研ぎ澄まされたまなざしによって、テイストを補 完した。

Hennionは、「愛好家の活動性=感受性は、密接な結合においてとらえられ、こうした結合なしには、活動性は一貫性をもたない」という考え方を発展させた。手がかりは閉じられたり開かれたりするが、愛好家を突き動かす情熱のなかで、プロセスは刻印(Hennionはこれよりもアタッチメントのタームを使う)とともに作用する。アタッチメントとは何か、それは「事

物とニュアンス、ノウハウ、レパートリー、基準、技術、共通の歴史、抵抗された進化」を構成している過去の経験から由来する。アタッチメントは、媒介全体(モノそのものの存在を共同生産している)によって形成される。愛好家はこうした存在をそのつど再獲得しなければならない。というのもアタッチメントは受け身ではないからである。つまり、こうしてテイストは、開かれた試験として登場するのであって、生成文法の産物としてではない。しかしそれがすべてではない。というのもアタッチメントは、(愛好家と事物のキャリアがそこへと収斂している)実践の共同体の制定に参画するからである。愛好家たちはこの共同体の中で、共有言語(手がかり)を交わし、彼らの同意を表明し、事物の特性への彼らのアプローチ(テイスト、価値、魅力)を表明し、新しい品質(「啓示」モデル――「パフォーマンスの究極の段階である」――で体験された)に翻弄されるのである。この意味で、アタッチメントは、保守的な力(コンピテンスと品質の)と同時に、(差異の生産による)イノベーティブな力を同時になしている。

「分散認知」(Hutchins, 1995)は、時間を通じての活動の行為様式と、学習形態、ネットワークが直面した出来事にたいする実践の進化、これらをクロスさせることで、活動についての類似した観念を発展させる。このネットワークの知識は認知的人工物や道具チーム、組織規範に具現化されている。Hutchinsにおいてもっとも欠乏しているのは、知覚的作業、身体のコミットメントである。身体のコミットメントこそが注意と警戒を保証し、イノベーションの源泉であり得る。Hennionが想起させるのは、実践家を作り上げるためには、永続的調節過程のなかで、身体によって、また身体が体験するものを通じなければならない、ということである。身体的経験のこの次元によりHennionは、テイストのアプローチを再精緻化することができた(La Passion musicale、Métailié、1993)。

「愛好家の反省性」について研究することで、Hennionはテイストへのプラグマティックな途上でいっそう遠くまで行くことができる。というのもテイストは、たんなる質的変数なのではなく、それは、人とモノとの間で結ばれる関係について語らせるからである。テイストはまさに、モノへの注目、交換過程での、起こっていることについての、通用することとしないことについての、決断=中断能力faculté d'arrêtを示している。実践的経験を通じて、またそのために、個人や集団が真正性という考え方に与える意味への道が再び見出される。ワインそのものや、ワインについての話し方、他者との感覚の共有の仕方について検討することが、反省性の第一段階である。Hennionにあっては、評価は、(積極的でもなく、受け身でもない)中間的な様式に基づき、ミクロな出来事を通じた存在物の到来に基づいた様式に基づいている。こうした出来事は、状況において、主体・客体の分割を乗り越える。テイストはまた、強い意味で「反省的活動」になりえる。つまりそれは評価基準や実践が一般性や歴史性をえるに応じて、(身体を通じて直になされた批評的作業に由来する共有された手がかりを生み出すことで)、言語化とズレを関与させる間主観的判断という意味でである。このこと

は、社会学的調査のために、実際の実践(ここでは愛好家)から入ることを意味するが、職業的活動のすべての形態にとっても同じ論理である。

愛好家の姿の構築において、コレクションが主要な役割を演じる。音楽愛好家が、録音された当時よりもかなり最近の好みに応じて、どのように自らの個人的レコードライブラリをそろえるかが、その愛好家のテイストを描写してくれる。ライブラリの物理的空間は、作品への関係の歴史の軌跡を含んでいるが、同時に、知覚と判断を醸成するための装置として役立つ。Hennionにおいては、装置が重要な役割を演じているが、経験を排除しない。つまりテイストは、状況におかれたその時々の機会として受け取られ、もしくは、他者により導入されうる。こうした経験が驚きと差異を創出する。この方法には相対主義のリスクはない。つまり、単に新しい経験と継続的発見(愛好家のキャリアに伴って生じる)への開放を考慮することが重要だからである。このような明らかにプラグマティックなアプローチは、テイストする身体と、事物のテイスト、愛される事物のレパートリー、愛好する集団とが、どのように同時に産出されるかを示してくれる。こうしたアプローチは、事物の「キャリア」の分析、事物や人の分類の分析とは両立不可能ではない。それは、そこに記号システムや同一化、区別立てしか見ない、還元主義を同避させてくれるのである。

# (4) 絶えざる刺激として:プラグマティズムのおわりなき開放

ここ数年来、プラグマティズムが復活している、あらゆるところでその創始者たちを読み 返し、プラグマティズムと現代社会科学の結合について検討している研究者共同体が見られ る. おそらく「プラグマティックな転換」のアカデミック化の運動があるのであろう. 2008 年のTrace誌の特集号が、その広がりと鍵を与えてくれている、しかしその力強さを過大評価 すべきではない、というのも、(プラグマティック社会学が、最もありふれた行為と判断の形 態に向けるように促す)視点に固有な脆弱性を強調しなければならないからである.今日. 最も堅固に確立されているモデルや概念道具が獲得してきた強さについて考えるだけで十分 である.これらのモデルや概念は.感覚的手がかりや.事物との身体的接触.それと関連し た実践的現象学のすべてを形式的で合理的な思考の盲点へと縮減したのである.すなわち数 理経済学であろうと政治哲学であろうと、ネットワーク理論であろうと、認知科学であろうと、 モノと接触した行動の手がかりの製造という手法は、これらの学問において、経験論や主観 主義、内在主義によって汚されるように思われるのである。さらに実践活動への注目は、現 代の大きな問題から研究者を遠ざけるリスクがあろう.すなわち「ガバナンス」の問題や、「テ クノサイエンス | と関連した経済権力のそれ、市場規制、「リスク社会 | 経済的、環境的、 政治的な「危機」の問題である.状況におかれた活動において開示される手がかりに関心を 向けることは、グローバルな問題への参照が課せられるとしても、後景に退かされるとまで は言わずとも、ずらされるように見えるかもしれない、ところが本書の再版の争点は、まさ

にそこにある。すなわち人やグループが、(装備され、道具を与えられている) 感覚的経験を通じて、現象についての手がかりを生み出すさいの複数のやり方から再出発することで、正体を隠したモナドの継続的操作により生み出される隘路から脱却できるのである。つまり、繰り返しの試験を通じて、現実についての共通の知覚を生み出しているものを見ることで、たんなるスローガン(ローカルとグローバルを接合するように促すような)から脱却できる。こうした目的は単なる付け足しではない。というのも、適応と創意工夫、移動の能力の生産を具体的にとらえることが大事だからであり、それらなしには社会的世界は実践不可能で、生きていけないであろう。

社会科学において、プラグマティズムは、今日いっそう実践されている方針である(その受容には強弱があるが)、プラグマティック社会学はもちろん、その創始者のパースやジェームズ、デューイ、ミードらによってなされた提案から評価されることができる。しかしこの社会学は、現代の社会科学の中心にそれがもたらした事物の地位によって理解されることもできる。こうして警告者や主張の唱道者(複雑な過程についての手がかりを持とうとし、見えない現象に注目し、公共問題の軌跡を考察しようとする)の問題を発展させることでプラグマティックなアプローチは有効である。じっさい、プラグマティックな探索を検討するのに複数のやり方がある。例えばこうした探索は、特定の環境で把捉され、状況におかれた活動に注目することであり得る。すなわち候補者を選抜するリクルーターや、能力評価する人事部長、もしくは融資を認める公共エージェントから、音楽愛好家やワイン試飲者、生物多様性に関わる生命形態に注意深い生態学的人類学者に至るまで(幾度も操作され、もしくは再構築された古文書や軌跡――これらは今日、コンピュータ世界の変容に直面している――によって手がかりを持つ歴史学者を忘れてはいけない)、多様な環境において探索がなされている。

(単一の計算空間には容易に放り込まれない)複雑で進化的な世界において実践を枠組みづけている規則と規範、標準の全体の調節や妥当性がどのように作り出されるかを理解することが争点でありえる。すなわち不確実性の複数の源泉を持った組織、コントロール装置を調和させようとするアクター、共通善の考え方と結合した価値や原則の現実的実施に配慮する公共政策の担い手、これらからなる世界である。もう一つの探求方法は、支配ないし権力の新しい形態に関わるかもしれない。それは、ますます混合したネットワークに組み込まれ、その中ではアクターの間での持続的手がかりの非対称性が演じられているのである。

ここ数年来プラグマティズムと社会科学の間での関係の問題がフランスと欧州の知的シーンを占めている。こうして社会学の多様な潮流による「プラグマティズム」の要求は、ある種の批判的再評価の対象となっている。すなわち「プラグマティックな」もしくは「プラグマティズム的な」転換について語らなければならないのか、ということである。創始者たちへの、さらにはローティやパットナムのようなより現代的なプラグマティストへの言及がいかになされるのであろうか。結局、現代社会学とプラグマティズム的主張との間には多くの

収斂がある。すなわちラディカルな経験主義の形態であり、それは、経験に与えられる役割。 問題の再定義の継起的サイクルへと開かれた探求の論理、行為の重要性、さらに、よりしば しば、行為の形態もしくは論理の複数性の強調、パブリックの形成、社会過程への科学や技 術の絶えざる再統合(テクノサイエンスをめぐる公共討議の激しさによって、今日、見られ るように、社会過程は科学や技術を支えると同時に制約もする)、これらに示されていること である.それと同時に、経験的事物と、使用される分析枠組みとに広く関連した多くのズレが、 プラグマティズムを確立している哲学的経験のタイプと、社会学的研究の発展との間で明ら かになっている。こうした観点から、手がかり概念の使用が促してきた考察は、ひるがえっ てプラグマティズムとその将来の姿を統合するように促すのである.こうした考察は.状況 におかれたアクターの能力への注目、アクターがどのように自らの世界を布置化し、記号を 解釈するかについての注目としての、手がかり概念についての考察なのである。プラグマティ ズム哲学の中で手がかりの社会学を延長させることで、経験の現象学と精神の自然化との間 の緊張を克服し、もしくは移動させる手段を与えられるのであろうか、魅力的な生活形態、 存在物に囲まれた柔軟な存在様式から得られる、美学的な次元は、功利主義の繰り返される ショック(「プラグマティック」という語句の日常的な使用と関連づけられる)より長生きす ることができるのであろうか、「実践」という上手い、古い概念では、プラグマティズム的転 換において争点となっているものを特徴付けるのに十分ではないのだろうか、すなわち実践 への単純な回帰が問題となっているのだろうか. プラグマティズムと実践学praxeologieとの 間で、とりわけ手がかり概念は実践的活動を眺めるよう強いるという利点を有する、こうし た観点から、Richard Sennettが、職人についての自身の著書の中で、プラグマティズムの戦 列に加わったことはけっして余談ではない.

『専門家と贋作者』において展開された議論との調和した共鳴のために、上述で、愛好家とアタッチメント形態についてのAntoine Hennionのテキストを我々が強調したとすれば、手がかりの社会学の議論や批判的使用、多面化は数多くあり、かなりの流通をなしており、その単なる記述だけでも後書きの形式をはみ出してしまう(はじめは手短にと思っていたのだが)、知覚のプラグマティック社会学を豊富にするのに貢献した主要な著者をあげておこう。まずJean-Yves Treposがあげられ、彼は早いうちから、専門家の作業の再定義の重要性を理解しており、その概要を記述した(La Socilologie de l'expertise, PUF, 1996)。さらに環境社会学のRémi Barbier(Le Monde du résidu. Pour une sociologie politique des objets, HDR, 2005)がいる。

(訳者註:以下、名前のみあげておく. Dominique Vinck, Nicolas Dodier, Albert Piette, Dominique Boullier, Lydie Réné, Pascal Duret, Patrick Trabal, Jean-Paul Fourmentaux, David Pntille, Lucien Karpik, Jacques Roux, François Eymard-Duvernay, Emmanuel Marchal, Claire Lamine, Alexandra Bidet, François

Brun, Delphine Corteel, Jérôme Pélisse)

# 参考文献(省略)

(2019.2.13受理)